

修理修景事業における基準の運用実態とオーセンティシティ —佐渡市宿根木重要伝統的建造物群保存地区を対象として—

正会員 ○會田 千春*
同 岡崎 篤行**

修理修景
基準
オーセンティシティ
伝建地区
佐渡市宿根木

1. 研究の背景と目的と方法

現在、全国の重要伝統的建造物群保存地区（以下、伝建地区とする）では、基準に則し保存事業として一般的に修理や修景が行われている。しかし、修理修景事業は方法によってその地域の歴史的景観に悪影響を及ぼす危険性を含んでいる。先行研究^{1) 2)}では、オーセンティシティの視点から修理修景を考えることは重要であるとされているが、これまでの伝建地区の研究ではその視点を含むものは少ない。そこで本研究では、伝建地区の見直し調査が進んでいる佐渡市宿根木において、①修理修景事業の実態を把握し、②問題点を抽出、③その要因を明らかにすると共に④改善策を提案することを目的とする。

まず伝建地区内の建物の特性把握のため、外観調査を行う。事業物件で基準との照合や事業前後の外観比較より、基準の運用実態を明らかにする。またオーセンティシティの視点⁽¹⁾から問題を抽出、昔の写真や調査報告書³⁾、関係者へのヒアリング等を踏まえ要因を明らかにし、問題の改善策を提案する。

2. 修理修景事業の実態

1991年に伝建地区に選定され、現在までに修理事業が54/106件、修景事業が7/120件終えている【図1】。修理事業前後での外観要素の変化は多く、その中で特に町並みに大きく影響を与えている屋根仕上げ、外壁色彩、開口部建具について3章で詳しく述べる【図2】。外観要素の変化には、基準や施主の意向、設計者の提案が影響している。町並みに大きく影響している変化については基準の影響が大きい、外壁色彩においては基準への記載はないが基準外のルールがある。細部意匠等は、設計者の提案が最も影響している【表1】。

3. 代表的な外観要素における問題

1) 屋根仕上げ

元々は石置木羽葺きであったが江戸から明治にかけ石見瓦が使用されるようになり、1923年の大火を期に土蔵を中心に石見瓦葺きが普及した。1945年頃からセメント瓦、1960年前後には能登瓦が土蔵以外の建物にも使用されるようになった。事業では、石置木羽葺きが多く「歴史的価値の保存」⁽¹⁾がなされている【図3】。木羽葺きは耐久年数が瓦葺きに比べて短いため、事業開始当初に木羽に樹脂を浸透させる等の提案がなされたが、提案者の

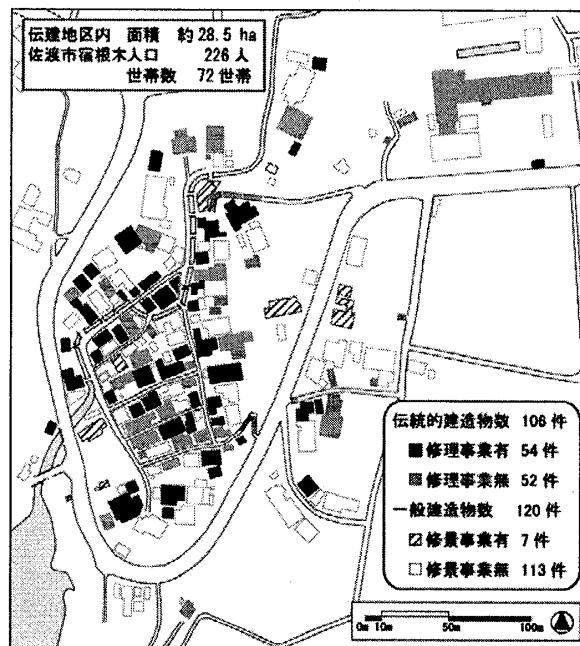


図1 修理修景の現状(主要部分のみ)

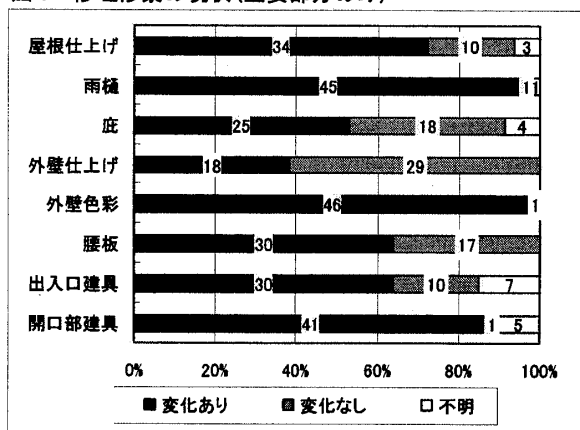


図2 修理事業による外観の変化(グラフ内の数字は件数)
凡例: ■ 修理済み □ 未修理 (図3,4,5 共通)

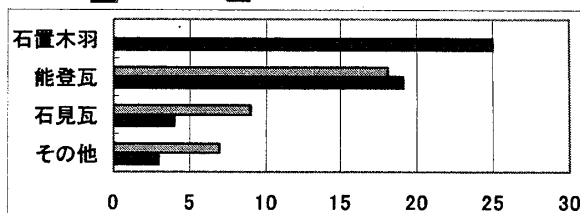


図3 屋根仕上げ種類と件数(伝統的建造物)

想定していた耐久年数以下で雨漏りが生じ住民から苦情が出ている。ここで、「歴史的価値の保存」と居住性の双方を偏りなく配慮するため、木羽の耐久性向上に更なる工夫を検討し、今後も石置木羽葺きを推奨していくことで問題改善につながると考える。

2) 外壁色彩

古くから板張りで着色なしの外壁がほとんどで、現状でも未修理の伝統的建造物は着色なしが多い。しかし、修理済みの伝統的建造物ではほぼ古色系となっており、「歴史的価値の保存」がなされていない【図4】。事業開始当初、周囲との調和や退色経過等の様々な配慮を基に色調の提案がなされた。現状では、基準への記載なく慣習的に同一色への塗装が行われ、対象地区内で町並みとして全体的に画一化している。「歴史的価値の保存」をしていくには、塗装も着色もせずに自然と周囲になじんでいく方法が考えられる。また塗装や着色を行う場合でも、様々な色調や塗装方法の選択によって改善可能である。

3) 開口部建具

居住性向上のためアルミサッシ等が普及し、建築当初から変化が見られる場合が多い。調査報告書³⁾によると、対象地区内の建具は板戸、障子戸、格子戸が主で建具の外側には格子が付くことが多いとある。しかし、昔の写真を見ると現在の修理修景事業で用いられているような格子ではなく、簡素な外観に大きな影響を与えない程度のものであったようである。未修理の伝統的建造物では格子が見られない【図5】。他に障子ガラス（ガラス＋スタイロ障子）の使用も見られる。格子や障子ガラスの多用は、必ずしも「歴史的価値の保存」とはいえず、「調和と個性」⁽¹⁾も守れない可能性がある。今後は、宿根木の特徴である「簡素な外観」を損ねないデザインの工夫、個々の建物に適した格子等の使用を心がける必要がある。

4. 結論

- (1) 対象地内で、修理修景事業物件の外観要素は事業前後での変化が多く見られ、全体の町並みが画一化している。
- (2) 事業による外観要素の変化が多く、特に屋根仕上げや外壁色彩、開口部建具等で見られる。これらは、全体としての調和を重視するあまり、個々の建物のオーセンティシティへの配慮が不足しているため問題となる。
- (3) 問題の要因としては、事業開始当初や基準作成時には設計者、提案者側として配慮していたオーセンティシティの視点が、現在の事業関係者に十分に伝わっていないことが大きいと考えられる。
- (4) 問題改善のためには、それぞれの建物の各外観要素においてオーセンティシティの視点と居住性等の双方を考慮し、事業が行われることが重要である。また、関係者の意識向上や視点共有のために、まず住民にもわかりやすい基準の趣旨を説明した解説書等の作成が考えられる。

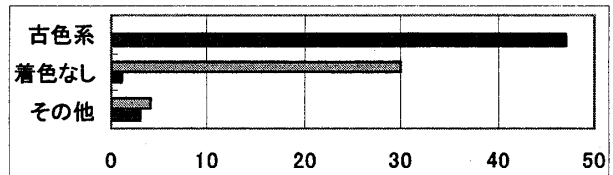


図4 外壁色彩種類と件数（伝統的建造物）

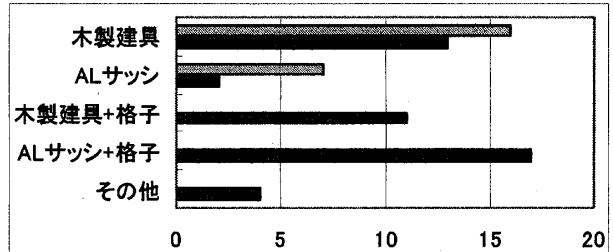


図5 開口部建具種類と件数（伝統的建造物）

表1 外観要素変化への影響と要因

項目	① ② ③ ④				要因の内容
	基準	施主の意向	設計者の提案	基準外のルール	
屋根仕上げ	○	△	×	×	①石置き木羽葺きを優先 ②瓦葺きの希望
雨樋	○	×	×	×	①銅板製角樋とする
軒先板	○	×	×	×	①木製の風返し板（破風・鼻隠し板・サルデ）
庇	仕上げ	○	×	×	①石置き木羽葺きor板屋根 ③基準記載外の細部の提案
	種類	×	×	×	②基準記載外の細部の提案
	軒下飾り	×	×	×	③基準記載外の細部の提案
外壁	仕上げ	○	×	×	①土壁を優先し、板張り（縦羽目板張り）とする
	板厚	○	×	×	①板厚30 ^{mm} 以上だと防火性能有り
	塗装	×	△	○	②事業開始当初は意見有り ③事業開始当初の提案（耐久・調和等）
	色彩	×	△	○	④現在は特定の色で塗装
	板継ぎ目	×	×	×	③施工・調和等への配慮
出入口建具	○	○	○	×	③復元への配慮 ①大戸or木製建具、ALサッシの場合は外側に木製建具 ②基準内で選択 ③基準記載外の細部の提案
開口部	建具	○	○	×	①木製の蓮子格子or建具、ALサッシの場合は外側に木製建具 ②基準内で選択 ③基準記載外の細部の提案
	大きさ	×	○	×	②居住性に関する意見 ③復元・調和等への配慮
	位置	×	○	×	②居住性に関する意見 ③復元・調和等への配慮

○:変化に影響している △:見られるが変化への影響はない ×:見られない

【補注】

(1) 本研究では、オーセンティシティの視点として「歴史的価値の保存」、「調和と個性」を設定する。「歴史的価値の保存」は、建物単体のオーセンティシティについて示されている記念建造物および遺跡の保全と修復のための国際憲章（ヴェニス憲章）第9条を参考とし、町並みとしても確実な資料に基づく美的、歴史的価値の保存は重要であるとする考え方。「調和と個性」は、周囲との調和を保ちつつ個々の建物の歴史的特徴や個性を失わないことが重要とする考え方。

【参考文献】

- 1) 小林治郎：修理修景事業におけるファサード意匠のオーセンティシティに関する研究 一倉敷川畔伝統的建造物群保存地区を対象として、新潟大学大学院自然科学研究科修士論文，2002
- 2) 斎藤英俊：「建築物保存修復の理念および方法に関する研究」，文部省科学研究費補助金国際学術研究成果報告書，1998. 3
- 3) (株)TEM 研究所：「宿根木の町並みと民家・I」，佐渡国小木民俗博物館，1993

*新潟大学大学院自然科学研究科 博士前期課程

**新潟大学工学部建設学科 准教授・博士（工学）

*Graduate Student, Graduate School of Science and Technology, Niigata Univ.

**Assoc.Prof./Dept. of Civil and Architecture, Faculty of Eng., Niigata Univ., DR. Eng